新武尻傳来記

六

へ13
3270
6

特
へ13
3270
6

好文堂

新武道傳来記

諸國敵討

巻六

才一

目録

鼈ヶ武勇者尻
雪に沁みと曙乃月端

才二

霧ヶ丸乃色太刀新の紅
逆行尻和人ゝ太刀先

第三

修羅道ハ現乃世諍

溝ゟ熱湯わき出る井戸

修羅道ハ現の世諍

近年乃流行ものとて南から吹ものも油断ハならぬが今日ハとりわけ例の去年からわづらひもひよひとれば穴ぐらもみゆるくて逃る仕合。此方ハ荒の侭じぬまもおそろしく大屋の万歳楽の拍子のよふす自然あづからひあがりしとぞとくは。火事の虫よりおそろしかるやうな事いふてしかるぬむさもひとの大きなをもつてきぬべらくへかまいませう。おかもしてぬ宿でしらぬ仕廻せましてやつらがさく蔵へたのみませうとのひとそしろ人がはやく座敷のるゐる荒山積無体なしハ豊後の旧本牢人葛西兵衛なりとひし元和の頃人なれど。不忠のうぬそ浪人せし年来乃

町どまるね。貪よるまてハ勤なでいやかものないてふふハ
つさ一ゑ乃九左ゑ門ゑ景ゑ
菖布と名のゝ也。四谷色の大家よ出ゝ。太守を
九左ゑ門ゑ出ゝつさの屋ゑ
清側とゝのゝ拾ゝず清都中ゑ
ゝ十八面凡のそゝ
まび入よ。也屋とゝ知ゝく
七十よあまり老の身の安ゑ
色の色ゑ。窮屋ゑ屋ゑ
ゆゝにゝゝとゝ辞退ゝにゝ
ゑ清助成五人捉拾ハ九左ゑ門ゑ合かふに内紀

紙作財ゑ。布ハ神田鍋町三町目ゑ
ぬゝ汁ゑ四季ゑ
ゑひ色ゑ焼物ゑ
かゝ実ごゝく町ハ三丁目
屋祢ゑ
小若ハ門ゑ
ゑ。四ゝとゝ屋ゑ
中柄ゑ
ゑ。体秘義ゑ
とゝゝゝ
ゑでハ公ゝ

きものハかゝりし隣のこご乃八と衆とかゝりあう。げにもわか
軍書のもとめるきにうくみゆるに十冊ぐるまおもじ
老の身ごしのつまきよろゝがいかゞしてたち杖よついてお城の
もゝ八出頭が京あまよらせちゞよる騎るれ大せしぢからく乃
了ゑ八ゞちかさあとのうゆがてよく居とりけあへぬゆつきさ
一騎一本杖かり立する侍わるをちらし。おとより参る無体
小者の七蔵が屏風のもとみにがの侍のすそつけひきくめて
行ちぶみ件ひやしま馬ハかけ行のもと手ハあと引へゆまてく
落るもとろるとどるそかゞゆくくにもつて悔へてあづさぬは
世あくものゆるぎの中。やどある若黨大ぎよろしたち七蔵
とじやよくれ溝へつきなとて。侍ハ大ぜひの中まてそろへあど

出ゆきたふせさあげ。おハゝ老若の見さかへまも及ばず
かんかんがらねし座りおりもり。無体をゆしよわ小者を
ぬすもりんめんかゝねとぞうじいふぞ座りと合もゝれ
むりや八若黨二人小者中ろ主人まじりまでハゆきは
御ろ無体ハつかふ討ちろさり。無体がつくやり騎るれ勝乃
下にさとらんでおもすもよかどの手とおほせてかへ七蔵ハ
主人の詩りとみるよわれさあかりんとすもぞるとどのせく
なぞ屏風が溝の石りさよけへてたまもあがもじゃへあるかそ
引のむもとびめ去ゆまだらくつしかゝず。ぴくゝしもろ内よ
騎るの士わるをたてゝ。一石橋とうけ面わ鍛冶橋乃内へ
のゝきらんで。ゆとも見せず。七蔵ゆりくよ小刀ぬいて〳〵を引

弓武道 巻六
五

弓武道 巻六
六

きりとてとりまきて腸指きまとあ[illegible]
が死骸乃力をつくしけるかの侍とおのくかつらく指
をもう火ばまくいかあ[illegible]へ行ものしつくてうどかず。
いくばくあるへう色ちくるくあ人の死骸とるこのうんとすまど。
あまをもう火の中自然の火薬おわるへしおくどやうく
よ年町とあけ八町ばかりもと四谷よめどうたれ[illegible]ぶ長
屋にゆいてうくとまりとぢかわうて[illegible]ようあく
うはあまあるべーををたくとあねよこのつぎとゆまりもたよせいし
とあまをトこといひなぐーぷ人くてせくあぜあるや人よまい
うけ西ぐうつてをそんとのつにぜ義すうしさらぐ拙[illegible]
性[illegible]のるの合点つねつーぐるふるを色ごをかくめ

色乃義のるまり故力よ及ぐる不かうを原い拙[illegible]
とるのたり此よハ拙[illegible]達自害仕をを色ととるくぐ。
溝よるをとくを[illegible]せりるゆ敵のるん不るるん人れ[illegible]
まで恒よりん[illegible]をトるそをで。拙日仇討かるくための
海[illegible]ハ立てトしぐ。[illegible]くきをかぐ人てをとあり
るり海を村ハ見恒のまへうてゆしうの[illegible]ぐ
るくぐ七義が口乃ちぐをねむのつうがーさありぷお者
かぐーを[illegible]ぐーとるん原をてぷたるよ
今ハかをぐ拙よ伝ー海とおぐて。父の死骸を人原け
そるまをとるをぐーるの敵ハ行くぐにるう海ぶれく。
るかくるぐゆりふ成く敵[illegible]と仇討のれ脇とトを。

殺すとも左右の手ゆ切落とすべし。おのれ前尾
よく仇討のうべ早く屋敷へ急ぎ帰れ。
乃ち小佐左衛門海と神よりへまゐれ屋敷と走り出
うもとより七郎が業内して父のやとし骸骨とゆびあり
よ路銭おのくの屋けり死人いづもとく別すと不仇の
若党ゆ云体たの方ちの二のうできりくぶしてと。
屋ちうもとひとつもとてとんとうゆ絶ゆ死ぶいたづ
牛。朝夕の業頼ちうて弟左衛七郎し仇ちう
屋き相続とちうしたの時れまひ中せひよ色ちう
鼻のたちゆんしーい皮づきんちうてあまた
沈殺ゆ云ふ皮黒沼ゆ白皮して背の後ちうゆ

三の子子の九屋ち所ハ金の九の二枚づけ。おいちうしハ
那織の神下猟くゆ皮ゆ山ちのきちうぎしてつせ義ゆ
はちうとそのみよ急てやこのふてちうちうんやう
かあてゆるいれやの仇と祈ちうんと佐左衛門今れ
知ゆ屋ちうかさあちゆ。ちうい天下れ万石ゆ敷ちうい中に
ぶんくせんきそゆしてちうきとゆちうもて行ゆ武士ハ一ちうち乃縁ちうて
絶方の菩ゆ武左衛門ゆ人のねゆ下ちう。武左衛門
去在江戸ゆ出ちうゆ佐左衛門ちうしく武左衛門方ゆ行
知ちうに強ちう知ゆすに武左衛門撃ゆとちうて成程く尚義
きゆちう者のくちうゆしてちうちうのやに云のしよに情や

叔父子とハいかなる男ハ当家中のさかひ矢梅しを
その時の喧嘩ゆへと知まへも見あきらかにはいハれを隠して
病気と称しゆきゆへそのこぶかし大事の役義をかく
るかたく打ちかぎりく改易今ハ道中乃放浪遊行
寺の道達とかなしくると。此頃しろまてとばまでまいり
叔父のかたさとしてゆみしとさとするのり口惜れ。
これハ当家の新来者ゆへとしてまかし。とかく一時も
とらく討れよまうじしかれまいらす頭家老の方よりんぐ
のかれてく早速あきらも出勝手清あるのよハ掃水表内よ
そのみ甚。佐太郎内々すて七歳一人ハかぶに移しひよか
ゑゆ若つまゞとすぐにそ不孫すちさはるすてハもち白づけ

案内ハ知ちり明日の孫どもみまもとしたみ能しをおやて
才一人若党一人以上四人と将付の支は討かへし
るかりそ七歳かそてうきいく若党とみかとろし
てみきとぞかれを溝よつきそめし男おんぐハの分ど
とかんしふむあるべ佛。

鶲ハ武勇乃嵐

会津山とよまちまちなる名所ハこの所万代の嶺とて鎮守
身ありける山たかり所またその景に初雪ひとしくあかると
いとおくまで数よ初り流ゆくゝ。音を里ハるとしていたく
城下ハ雪舟とつよとのよの峰かつてふかぐらしてれ白ぶと
雪も雨ゆしふこしれかり雪のそれだめ侍町の中に

あぐらに門とぢにつとあぐそをとだ。二月一日の昔やり向
かてとも也てとをるハ。やりくわされ汁れるゆうぐと
わもとそしこの雪せんさく。ものあるべ茶も
乃三月までいかもし切くくゆぐ理大のうらみ品菓ゆぐ
くよ四月もてのあと舎席姑よ連奇ようしかとべし
也。早速よ紙をうもう亭ハ佐爰新の命ようもの
わく百い白戸作を濃つか家を命右馬麻沢を命一沢
本を馬蜂田を命大。ものもと日頃親き中やり。今日ハ
陸よとうてい地ん家まて例まのごく初雪の秋舎姑
や色し。夕舎ようの故障ありこと結入ひりと行く殺来
源次命し安沢よ乃をと色て きます。ゆきとも地ん

物お遠めくわつまうか。一弘ひろうの大蓮屋ごと仕けり。
こうとうのまつく四出ます。源次命ひきてくるかよけ
まて祝く由よはゆ越のやうで色せねどもけが
きあんあと。出ないつ。ぐだ形く秋元のゆうせ。あ秋く
寄ハ入りて張乱ゆりぎ。きれ入蓮寿にうせた元ご二丈の
色ゆ物をゆけとで。保乃自慢の幸と大根で蕎麦切と
ドけぐぎとりいを乱ゆ世ぎの大盃一丈よひぐんま砕
が来ゆつでめるてのりのうひちんさくを。一ひくさん
色ぐでくさつとくわしハいつくをうしゆうかし
右命天ハ出とくゆとそのうし一隙ハ行ってくうやか
あん向り久あとりりしやぎんで実な。ぬそのりしく

和哥のうまどとゝ[illegible]ゆるゝ[illegible]ぬちと京ハさかりあいとかく
町人はんそ[illegible]ゝうろ[illegible]ぐ[illegible]あハよいやしにひしぐあらまろ
いまあてこのはハ分ぐもぐ方へいるもあとてゝとゝ[illegible]ぬ京ハ花
うまはいもぐゝと坂田花七ぐてはかりつぐ京太田とぬ京ハ
かぐさまいてうつくハりんなゝだやきれの事極もとゞ門おと
ゝとるかゝと雪舟よりうて中よ入しあらげぐう紙よもみ
うゝうゝうゝとゝとゝ花七ぐあてハあにあぐでぬゝうふかぐて
町のものゝやゝうゝひよあるぬぬもハ田ゝにかりてゝう
そのよゝ京太しゝぐ不真実ぐあるぬぬもあるゝひ京ゝ上坂
臨やゝ碎ぐ田ゝうくはハぐてくれゝとゝさゝれゝかぐゝ
うゝうの葉合よゝうのでぬぐあゝハみのゝもよさんゞ

そのゝ京ハ宿よりうてゝぬ京ぐぬゝうゝ仕かゝ
一ゝとゝにハ情けゝとゝぬゝ町人のゝぐもゝるとあひてゝで
ありてゝとゝべきゝやゝうゝもあゝぬゝ別のゝうゝべきゝとゝ
花ゝまゝうゝと田ゝぬりの紙食ゝよ甲賀町ゝ大町ゝまゝう
坂田屋ぐ京ゝうぬゝたしゝ代のゝうゝ紙ゝ食ゝ此ゝ花ゝ京ゝ
かゝうゝまゝどゝうゝくのゝうけゝりゝゆゝ今日坂田花七ゝとんで
ひ[illegible]ゝ度ゝ類ゝりゝ華ゝ麻布ゝゝこ京ゝしゝきゝてゝ京ゝゝ
きゝづひゝうゝゝゝりゝうゝまゝで若ゝ宰ゝの事ゝあゝまゝでゝゝゝ方ゝ同ゝりゝさ
ゝいゝりゝうゝてゝハ婿ゝぬゝうゝあゝるゝりゝぐゝかゝりゝしゝぐゝ京ゝゝりゝく
ひゝうけゝ事ゝくゝぎゝづゝひゝかゝてゝ事ゝ百姓ゝいゝひゝかゝべゝるゝ京ゝ京ゝ
ゝ[illegible]ゝ船ゝよゝ及ゝぐゝずゝゝだゝゝゝの角ゝりゝゝ京ゝゝ人ゝが[illegible]ゝ変ゝゝゝゝず

花七を同じくしぬ。ちゝはゝ酒肴と親へ、ゝ勧めし
ぬ。ちゝ命よりそのゝち年とかたるゝ花七ハうけて吸てたゝ
ぬとしてゝ、ゝくこゝろ。ゝきんをあまたのゝみ、ゝ起向
ゝ、ゝ別業とおもへずして。一日かたらしゝの書に
花七とゝ宿よゝして、ゝ体すてゝ、ゝ命いの
しゝ、ゝ、ゝくよりたゝよゝ、ゝ花七ハ、ゝ神のゝ、ゝ
せ先ゝ、ゝべき事ハ、ゝ。きちゝ、ゝ命太ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ命太ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ命太ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

知らずかゝる人をあやめしハ勘兵衛にてはよもあらず。
ありしことをよく/\さとすにぞ兵衛もはじめて心づき其もとを
天寧寺河原といふ所へゆきけるにぞおもひまはす其
親子のものを其時おもひかへりてはさもありなんとおもひかへして
善悪をわかちて人の心をおびきよせ其の仕合わせたりし娘人ありしが
会つくづくとおもひめぐらしけるに此喜三郎太ハありし事の始終を
語りしをきゝて心ありけれバ其ものども其まゝにすまされず
宿へかへりて人々をよびて其の死骸一体をかの内より
うけとりて其ものゝいさゝかなるまでしらべしかば上に書付の
ありしをみれバ此深雪が喜三郎太にまぎれなしと
のゝしりけるにぞかくてみなみな其まゝにて居たりける

書置し城下を立のき浪沢と云所よりかへりて深雪が病ハ
みな其とき出しぬ此道の見させ親共が在所に居りて病気
急なる故ゆき様子をみんとおもひてみな/\まかりしに
かの深雪と云娘ハ玉堂と云者の家に居る事ハ何事もなく
また新三郎と云人の其心して道中にありける人と文を通し
と吟味しける所かの喜三郎太親の急病を聞て尋ねゆきしが
ふかく此深雪をおもひ其まゝ先の様子にまかせけるとぞ。しかる
ところ其様子を見てまかりしたりけれバ先に其娘へ嫁しける人
ごとの事をきゝて其妻をつれて行き候ほどに婚礼をさせ
殺害の身の間に入り其兄の急病一時にさしおこりとて是をも
おもひ合せてかくハなるべしと其日の出ばかりの事なりと

大びきうつく移るぶんこと山れちついてるやとと
ちりぶめるゆ庵人ぶうとの手なたべ。他のりたるば
あのゆしよいあちつつれじとぞふとやうれしてきれを
いとりもとしいておこすにうるのおそでてをいつ移むいよ
ゆうのと移せくらまこってとぶりにもこと放ようくに移あ
あとりぶりぶじゆづけ合でーてらまいいつ初でるうあいて
ゆづをこにれあちついくくひれさ先ぶとやこあぬう原り
ゆうかーまーひぶーあ関原とづまで。芝浜こまより領ちう
雪とゆで関東かみの臨乳ゆくかつ尻ちとゆき
ぶとと白川物みとしどの白屋にいうぎ実路としと人を
うぶゆずにアゆでゆぶ一さんあぶいとまにお太ちうや

一里しゆくつきとちつふにちちてうが出屋よりて喧嘩の
相ひを命太よきてゆまでぶの人を見てぬとしてあちこかく
一方いのさうしんよといれにけしてしてちぶ義の人すあ
とい手ぶちちをが対うしいたしあぶ関路ゆまいぶせんと
物しちぶりぶりにに人ぶ色いちまちのあけるちちうぶ
身ちこ人までおのくぶりにいぶぶしてしん新太の科
ちうふぶりぶちこ命ぶ父のまま水大寺よりぶ成殿よあい。
一家切腹とちうへつあふ敵の縁ともしてぶまとくにア
といちつしきこえしー

寡志ちまの乃色太刀新の紅
上野の楊ちうと色灌ぶのあぶまちぶに緑乃野色。

陽もよつまてゆるくちてゆきあはぬうらうら
付乃瓢覃よりゆい遊ハきを屋ゝずゝ
あぶかりるゝ色の湖よ弟氏ちゆめむとせゝむゝ
がゝりふぞのゝゝもゝひ乃ちをゝの屋ゝ寺酒稼の卯乃
花ゝ乃ゝ乃ゝ年と見付ちをゝやゝかふをゝゝち
ゝ乃ちやゝにちゝゝを満ゝむ根籍ゝゝれゝといひ
をゝゆゝ沖ゝゆゝ年ゝ深井のゆゝゝゝゝゝゝ
乃ゝをゝかゝゝべゝゝいざみゝゝゆかんゝゝ春屋の伊を乗ゝ門
よゝゝ漁永の大乃新ゝゝゝ波とやゝゝゝゝゝ
ゝゝゝの花乃ゝを山屋ゝかゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝ表の方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をものと三人のものゝ乞ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ乃ゝゝ世ゝれ大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
血力ぬひて大ゝゝの中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ迄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

勇臣道 巻六

きらふりしあぬさんとたつく夜着よりすまし。内儀が中まで
二十あ六のきよのみなむ中よとする。是がていきもの病根
と見えあり。かの大男血刀ぬけくとうつけまんな。
三人のものどもれすぞこむ家と見つけまる人庭よりも内
まるわらみそすきどと三人のものゆくれて見るえぬゆく
ゆるむ病人とめげけてきびしくなる。女房いおぬそれ見やつ
よかるやく哀てやきらんぞ。それなるが長刀のさやとし
とづしあと何事ぞをいさんがりしうを合おいまくりて
きりあいやく大男の刀ををつこる右の手をうち落とし
てぐつと長刀をそつとしとうけたとすぺいしもの名は
永みる勘右衛門隣り別白子の牢人なりし。勘右衛門つし女房の

ころすくに助太刀せんとゆうくよせるがいろくにそでに
大男の首のところすこまでいゝ町人あまたありて縁の下よ
りきちつづいてくれとるのえがしさし。後よかくれて家
主人近所の庭しきより出で。中ほどより歩行乃
大男をも片身で額とそしきるを。何まで手の指きれ
より血のそうもあり。或いろいろとこれありもの家内て
きうもちろ何も落でおそうたひすることもの共とよりおきき
そんおいつけ事までも。又庭のもとをするきまでひどかりうの
いゝる足趾どもをでに。如てなかちせさてなり。勘右衛門夫婦
出合うて不附のあり中の何かは。いきよく前妻由とゆうよ
ほとぞ村もあり。所なるがぺうなる狼籍の仕かたすらうよ

屋ものもせそうなる人のまうしひ。一人い横手ゝく寄
一人を平田武兵衛と云へるを不和ゝ大家の御ゝ頭。
その外大目付の山本義右衛門先以御内家の御働。
勢角よりふ及ざる体たり。咲んゝ傍ゝよ相家ゝて傍ゝなた
よりつをいれ皆ゝ相乱しとりもいるあとをとらへ
ゝる間ふ無門とりけ中ゝ申しの仕合。そ代を綱法ゝ
仕ゝ今を一段やうゝかのゝ死歳とゝ所刑れ
御ゝ場ゝをゝ武兵衛をゝ町人ゝゝ
多くうすゝるゝ内ゝ中ゝゝゝゝ。
所の名ゝ人組役所ゝゝ御代表の横使
双方を合乱ものゝゝ人ゝ始のゝ細ゝゝ

江戸四日市 お多賀書館

かゝずゝゝ死歳とゝ所刑へゝてゝいゝ
刑元清ゝ明体の働ゝ侍のめ房ゝゝ
ゝゝすゝ刑元集ゝまくの仕合ゝ近所の
所変へゝゝゝ。番ゝ三十人捕ゝゝ
ゝ初三百石ゝ所ゝの御紋ゝ。大尾

東色友吉深　連日出ゝ

寶永三年正月吉日

京都　彫板屋治八

江戸日本橋南ゝ所目　同店彫師

好文堂